

遭難したメキシコ人を救った 御宿の村人

今日の日本でほとんど耳にしなくなった言葉に「惻隱そくいんの情」があります。これは中国の聖人、孟子もうしの言葉で、他者の痛みを理解し、何かをしてあげたいという人道的な性質や、不幸な目に遭っている他者への同情と悲しみの気持ちを表します。しかし、現代ではえてして自己の権利だけを主張したり、自己中心的な考え方を前面に出したりすることだけが個性尊重だと誤解されやすい傾向があります。今日ほど、相手の立場に立って物事を感じとる姿勢が大切な時代はないでしょう。

これからお話しする御宿おんじゅく（千葉県）の村民によるサン・フランシスコ号への救援活動は、今から400年も前に実際にあった出来事です。その後、この救援活動がきっかけとなって日本とメキシコの国際交流と友好の歴史の歯車が動いたわけですが、その背後には惻隱の情の力が働いたことを忘れてはならないでしょう。

ナラティブ

サン・フランシスコ号への救援活動

1609年（慶長14年）9月、ドン・ロドリゴ・デ・ビベロ・イ・ベラスコという前フィリピン総督が、サン・フランシスコ号に乗船し、ヌエバ・エスパーニャ（スペイン領メキシコ）へ向けて航海していました。ところが、不幸なことに暴風と遭遇し、その一千トンほどのガレオン船*は、日本の上総国*かずさのくに岩和田村（現在の房総の御宿）沖で岩礁に乗り上げ、破損し、沈没してしまったのです。乗組員373名のうちの何人か

は溺死してしまいましたが、翌日、何とか命を取り留めた317名が岩和田村田尻の海岸に漂着しました。その被災者の姿を目撃した地元の海女や漁師たちは、すぐさま救助の手を差し伸べたのです。この事件については、『ドン・ロドリゴ日本見聞録』に詳しく記されています。

さて、漂着したドン・ロドリゴのもとへ最初にやって来たのは、5、6人の村人でした。もちろん村人は日本語しか話せません。しかし、彼らは、ドン・ロドリゴの悲惨な状態を見るなり、言葉は通じなくても身振りや手振りを交えて、憐れみの気持ちを表しました。敵意のない善良な村人であることを感じ取ったドン・ロドリゴは、同行のキリシタンの日本人を通訳にして、自分がルソンというフィリピン諸島の長官であることを告げ、不幸な目にあった経緯を伝えました。すると、村人たちは、心から憐み、非常に同情深い村の女性たちははらはらと涙を流したといえます。

サン・フランシスコ号の遭難者の多くは、海中に飛び込んだ際に荒波にもまれて衣類がほとんど剥がれてしまい、裸同然でした。9月とはいえ、当時の気候は厳しく、外国人にとって外気は肌を刺すように冷たかったといえます。そこでドン・ロドリゴが「着物」という綿をいれた衣類を貸してほしいと頼むと、村人たちは、ドン・ロドリゴの分だけでなく、他の乗組員たちにもたくさん貸し出しました。岩和田村は非常に貧しい寒村で、けっして食料にも恵まれていたわけではなかったのですが、村人は、村にあった食物——米、ナス、大根、まれに魚類までも惜しむことなく振る舞ったのです。さらに彼らは、見ず知らずの一行に滞在先も提供し、ドン・ロドリゴは大宮寺に、他の乗組員たちは、全村民で300人足らずの家々に分かれて宿泊することになりました。今風にいえば、徳川時代版のホームステイですが、貧しいながらも至れり尽きせりの「もてなし」でした。

本多忠朝と徳川家康が見せた接吻^{せつぐう}

村人から連絡をうけた大多喜藩では、ドン・ロドリゴ一行の処遇について重臣会議が開かれました。会議から数日後、領主の本多忠朝^{ほんだただとも}*は、馬にまたがり、槍、長銃、長刀などで武装した300人の家来を引き連れ、ドン・ロドリゴのところへやってきました。その時、忠朝は、ドン・ロドリゴに敬意を示すため、西洋式に手に接吻をしたといます。忠朝の態度は終始友好的で、座に就く際にドン・ロドリゴに上座を勧めたり、華やかな衣類4着、日本刀一振、雌牛1頭、鶏数羽、果物、日本酒などを振る舞ったりと、歓迎の限りを尽くしました。また徳川家康から指示があるまでドン・ロドリゴ一行が大多喜藩内に留まることを許し、その間、ドン・ロドリゴ一行全員へ食料を支給することも約束しました。結局、彼らは岩和田村に37日間も滞在したのです。

1609年11月30日、ドン・ロドリゴ一行は、江戸に向けて出発しました。江戸城では二代将軍の徳川秀忠^{とくがわひでただ}と、駿府^{すんぶ}（静岡市）では駿府城の家康とも面会し、歓待を受けました。特に外国貿易に積極的だった家康は、ヌエバ・エスパーニャとの通商と、銀の精錬技師50名の派遣をドン・ロドリゴに要請し、一行に4000ダカットもの支度金^{したくきん}を与えただけでなく、帰国に必要な船までも準備しました。その船を建造したのは、9年前に同じく九州に漂着し家康に仕えた三浦按針^{みうらあんじん}ことウィリアム・アダムスでした。1610年6月13日、ドン・ロドリゴ一行は、この新造された西洋型帆船、「サン・ブエナVENTOURA号（按針丸）」で浦賀からメキシコに向け出航しましたが、その船には、家康の命を受け、ヌエバ・エスパーニャとの交流拡大をめざす使節として、京都商人の田中勝介ら日本人20数人も同乗していました。そして10月27日、現メキシコのアカプルコに無事到着しました。

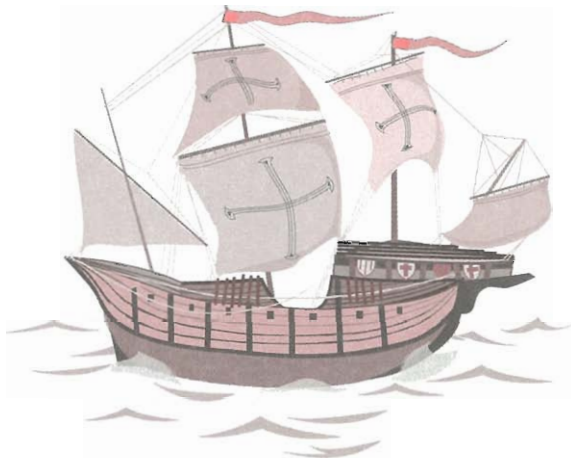
惻隱の情が歴史の歯車を動かす

その後も、両国の交流は続き、1611年、当時の副王ルイス・デ・ベラスコは、借入金の返済と、日本側からの厚遇への謝意を伝えるため、セバスティアン・ビスカイノを特使として日本に派遣しました。ところが、使命を果たして帰路に就いたビスカイノの船も嵐に遭遇して日本に引き返すことになりました。乗っていた船が大破したため、ビスカイノは、キリスト教に理解のあった仙台藩主、伊達政宗だてまさむねに援助を求めました。伊達は船の提供を約束し、「サン・ファン・パウティスタ号（伊達丸）」という船を建造しました。1613年（慶長18年）、伊達政宗の命を受けた家臣の支倉常長はせくらつねながは、フランシスコ修道会宣教師ルイス・ソテロ神父と共にこの船に乗り、来日して2年になるビスカイノとともに太平洋を渡り、ヌエバ・エスパーニャへと渡りました。太平洋岸にあるアカプルコで、一行は、ヌエバ・エスパーニャの国民から大歓迎を受けました。その後、アカプルコから陸路で大西洋岸のベラクルスへ行き、ベラクルスから大西洋を渡ってイスパニア（現スペイン）とローマに至り、イスパニア国王フェリペ三世とローマ法王パウロ五世に謁見しました。日本人とイスパニア人総勢合わせて180人余りのグループで、「慶長遣欧使節団」と呼ばれています。

その後、日本は鎖国体制をとり始め、1613年にキリスト教を禁止し、1616年にはヨーロッパ船舶の来航を平戸と長崎に限定しました。そのような中、1625年、フィリピン長官は使節団を日本に派遣したものの、日本への上陸を拒否されてしまい、これをもって日墨にちぼく（メキシコ）関係は一旦中断しますが、後に日本とメキシコの友好関係は再構築されます。

長い歴史のスパンで日墨関係の経緯を振り返ってみますと、あの御宿での出来事が、数々の画期的な史実を生み出すきっかけになっていることに気づきます。たとえば、徳川家康の使節団がウィリアム・アダムスの建造した船でメキシコに渡った航海は、日本人初の太平洋横断でしたし、ビスカイノの遭難が縁で派遣された「慶長遣欧使節」は、日本の対

外交史から見ても、またカトリック教の歴史から見ても、「天正遣欧少年使節」と並ぶ画期的な出来事でした。これらすべてを含め、その後の日墨友好の歴史的起点は何であったかと問えば、あの純朴な御宿の村人たちが見せた惻隱の情であったといっても過言ではないでしょう。



質問

●あなた自身の体験で、一つの小さな出来事がきっかけとなって誰かと友好的関係を築いたという体験はありませんか。

●「岩和田村は非常に貧しい寒村」であったにもかかわらず、村人たちは、どうしてドン・ロドリゴたちに、至れり尽くせりの「もてなし」をしたのでしょうか。

●支倉常長の一行が太平洋を渡り、ヌエバ・エスパーニャの国民から大歓迎を受けた要因としてどのようなことが考えられますか。

●日本以外で、あなた自身が好感を抱いている国はありますか。それは、どうしてですか。

●世界に誇れる日本人の美徳には、どのようなものがあるでしょうか。

ひとくちメモ

ガレオン船：16世紀前半に出現した帆船で、船幅、竜骨長、甲板長の比が細長く、船首楼や船尾楼が低いという外形上の特徴がある。

上総国：「かずさのくに」と読み、現在の千葉県中部（房総半島北部）にあたる旧国名。

本多忠朝（1582～1615）：江戸時代の大名。19歳の時に参戦した関ヶ原の戦いでの功績を認められ、父の本多忠勝ほんだただかつの旧領をあたえられ上総大多喜藩主本多家初代となる。5万石。慶長20年5月大坂夏の陣で戦死。34歳。

気づきのコラム

日露戦争中、ロシア兵を救助

御宿以外にも、困っている外国人を救済した日本人の活動はたくさんあります。皆さんの地域でどのようなエピソードがあるのか調べてみましょう。

これから紹介するのは、戦争中であるにもかかわらず、嵐の最中に、島根県和木の村民が皆で協力し合い、投降した敵国のロシア兵を救った物語です。

1905年（明治38年）、日露戦争のさなか、東郷平八郎司令官が指揮する日本海軍連合艦隊は対馬東方沖でロシアのバルチック艦隊を迎え撃ち、日本海海戦の火ぶたが切られました。海戦中の5月28日、ロシアのバルチック艦隊の特務艦「イルティッシュ号」が日本海軍の砲撃を受け、船体が損傷してしまいます。イルティッシュ号は、北上を続けていましたが、艦の損傷による浸水が激しく、島根県那賀郡都濃村和木（現在の江津市和木町）の真島沖で航行が不能となりました。その後、艦が沈没し始めたため、乗組員たちは、陸地から2海里（約3.7キロメートル）の地点でボート6隻を海上に下ろし、重傷者から順番に上陸することに